

宮城県稻作情報

平成11年10月6日発行

第7号

宮城県稻作安定対策本部・社団法人みやぎ原種苗センター

編集
宮城県農業センター

気象経過と生育の特徴

登熟期間は気温高く、日較差小さい

ひとめぼれの成熟期 9月10日、平年より8日早い

これからのおやじの要点

適正な乾燥調製で品質確保

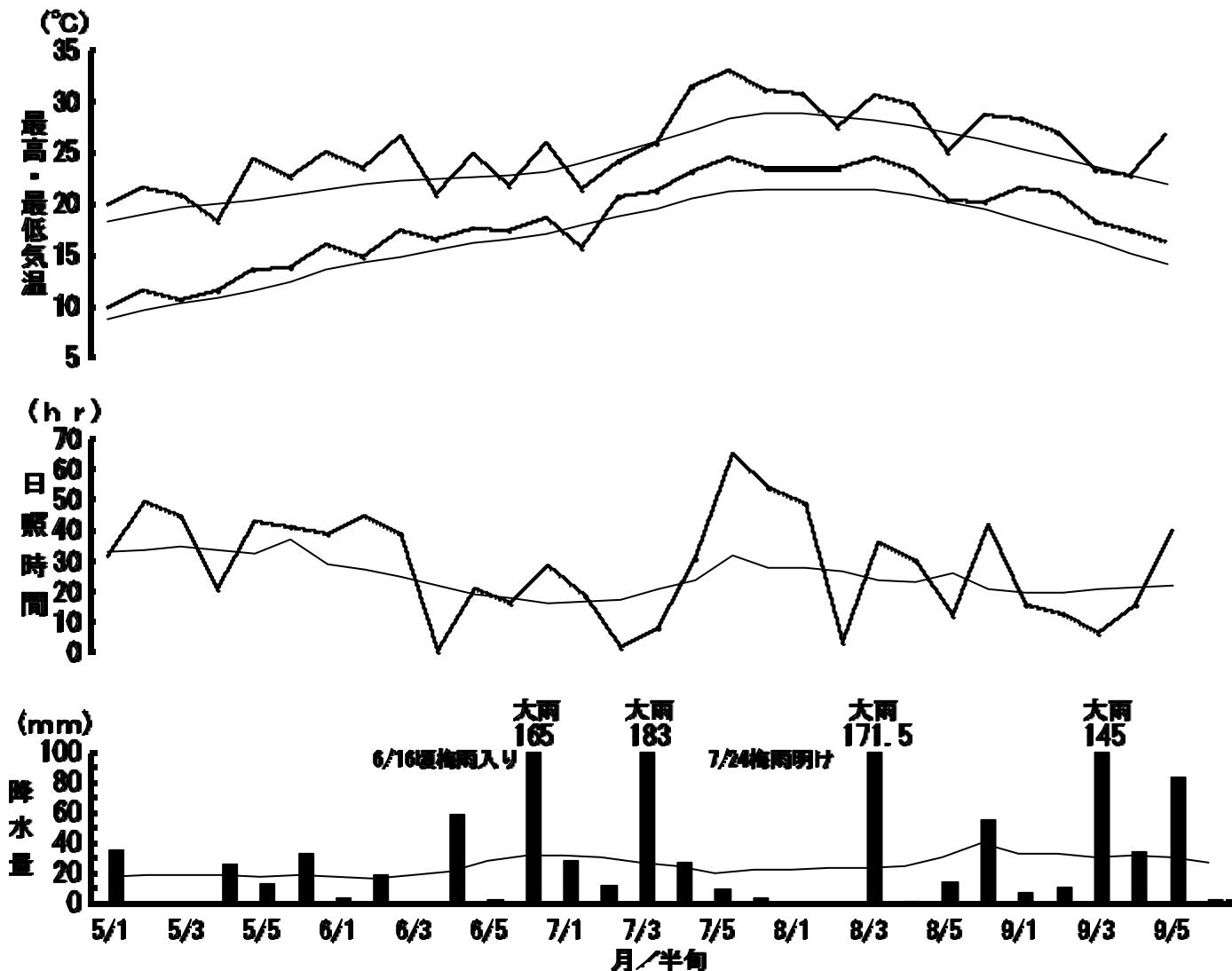


図1 気象経過(観測地点:仙台管区気象台)
(5月第1半旬~9月第6半旬)

気象経過 登熟期間 気温高く,日較差小さい

【気象経過】

9月に入ってからも引き続き気温の高い状態が続いた。最高気温は、9月第1半旬から第3半旬にかけては平年より2以上高く、最低気温は第2半旬と第3半旬では平年より3以上高かった。

9月上旬の後半から中旬にかけて雨が降り続き、第3半旬が145ミリ、第5半旬は83.5ミリの大雨となった(図1)。

【登熟期間の気象】

登熟期間の気象状況について、県平均出穂期(本年は8月1日)の翌日から5日間ごとに集計した結果が表1で

表1 登熟期間の気象

出穂後日数	本年			日照時間 (hr)	平年差・比			日照時間 (%)		
	気温()		日較差		気温()		日較差			
	最高	最低			最高	最低				
1～5日	30.5	23.2	7.3	51	+1.8	+1.8	0.0	182		
6～10	30.5	23.5	7.0	41	+1.9	+2.1	-0.2	151		
11～15	26.9	23.3	3.6	3	-1.5	+1.9	-3.4	13		
16～20	30.8	24.3	6.5	42	+2.9	+3.0	-0.1	177		
21～25	29.0	22.6	6.4	25	+1.5	+1.8	-0.3	108		
26～30	24.7	20.3	4.4	7	-2.2	+0.1	-2.3	31		
31～35	28.6	20.1	8.5	41	+2.5	+0.7	+1.8	203		
36～40	28.3	21.5	6.8	16	+3.0	+3.1	-0.1	80		
41～45	26.8	21.0	5.8	13	+2.4	+3.6	-1.2	65		

注)仙台管区気象台データ 気温は期間平均値、日照時間は期間積算値

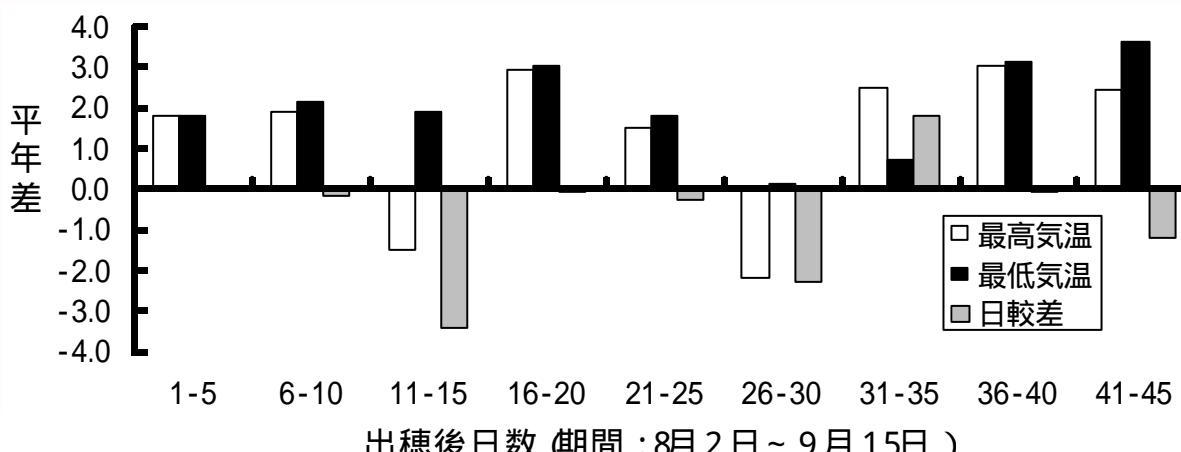
ある。

出穂翌日から10日までは最高・最低気温ともに高く、日照も多かった。11～15日は最高気温が平年より低く、最低気温は高く、日較差は平年より3以上小さくなかった。日照時間も平年比13%と少なかった。

登熟半ばの16～25日にかけては、最高・最低気温ともに高く、日較差は平年をわずかに下回った。26～30日は最高気温が低く、最低気温はほぼ平年並で日較差は小さく、日照時間も平年比31%と少なかった。36日以降は最高・最低気温ともに高く、特に、最低気温が平年より3以上高かった。日較差は平年を下回り、日照時間も平年以下であった。

登熟期間を通じては、最高気温は平年より低い時期があったが、最低気温は平年より高い状態で経過し、日較差も全般的に平年より小さかった(表1及び図2)。

図2 出穂後日数別の平年差



生育経過 登熟は緩慢

【生育調査圃の出穂後25日調査結果】

北部平坦では、 m^2 当たりの穂数は506本で、平年比113%，1穂当たりの粒数は62.3粒で平年比95%となった。 m^2 当たりの粒数は313百粒で、1穂粒数66.0粒で平年比102%， m^2 当たりの粒数は338百粒で平年比116%であった。沈下粒数歩合は、 m^2 当たりの粒数が平年並であった西部丘陵及び山間高冷を除き、いずれも平年を下回っており、特に南部平坦と仙台湾沿岸で大きく低下している。

県全体では、 m^2 当たり穂数は平年を上回り、1穂粒数は平年をわずかに下回った。 m^2 当たり粒数は、穂数が多いことから平年を上回った。沈下粒数歩合は平年をわずかに下回った(表2)。

表2 地帯別生育状況

地帯区分 圃数	調査 圃数	m^2 当たり穂数			1 穂 粒 数			m^2 当たり粒数			沈下粒数歩合		
		本 年 (本)	平年比 (%)	前年比 (%)	本 年 (粒)	平年比 (%)	前年比 (%)	本 年 (百粒)	平年比 (%)	前年比 (%)	本 年 (%)	平年差 (%)	前年差 (%)
北部平坦	18	506	113	109	62.3	95	94	313	107	102	81.8	-3.2	-0.6
南部平坦	7	511	114	109	66.0	102	105	338	116	115	76.4	-9.2	-2.9
仙台湾沿岸	7	554	108	125	60.9	101	91	337	109	115	81.4	-10.6	+7.5
三陸沿岸	3	493	98	112	60.4	101	95	295	109	106	85.7	-3.7	+0.4
西部丘陵	6	460	106	106	63.1	94	93	287	98	99	87.6	+4.2	+3.3
山間高冷	2	385	97	104	73.7	102	99	284	100	102	89.7	+2.1	+2.9
県平均	43	502	110	110	63.2	98	96	315	107	106	82.3	-3.3	+1.0

注 平年 過去50年平均値。 平年比 差 平年値を有する調査圃のみ比較

【作況試験圃の登熟状況】

農業センター作況試験圃のひとめぼれとササニシキ(いずれも5月10日稚苗植)の成熟期は、それぞれ9月10日、9月13日で、ひとめぼれが8日、ササニシキは6日平年より早かった。

両品種の登熟状況を下図に示した。ひとめぼれは、出穂後30日まではほぼ平年並に経過したが、その後、緩慢となり35日以降はほぼ横ばいで推移した。ササニシキは平年をやや下回った状態で推移し、ひとめぼれ同様、出穂後30日あたりから緩慢となった(図3及び4)。

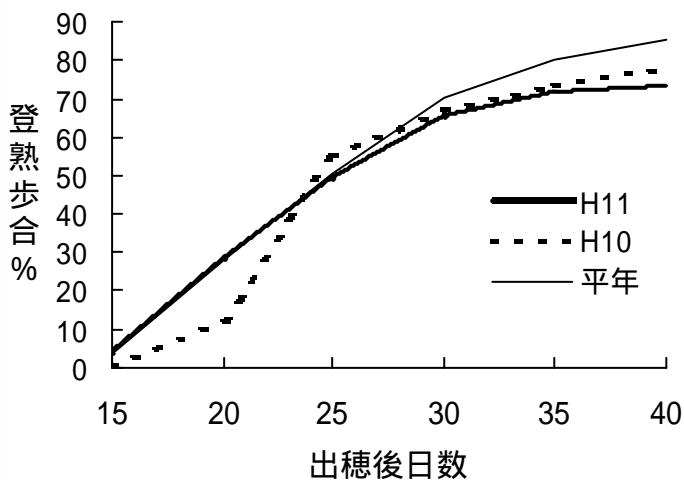


図3 登熟歩合の推移 (ひとめぼれ)

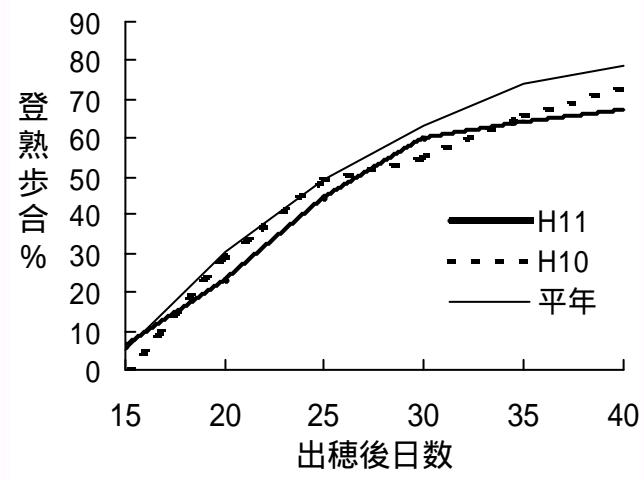


図4 登熟歩合の推移 (ササニシキ)

下の図は、玄米千粒重(粒厚1.7ミリ以上)の推移を表したものである。ひとめぼれは、出穂後30日までは平年を上回っていたが、その後、粒重の増加が鈍化し、平年をやや下回る状況となった。ササニシキは出穂後15日時点では平年を上回ったが、その後は平年並で推移し、ひとめぼれと同様、出穂後30日からは平年をわずかに下回った(図5及び6)。

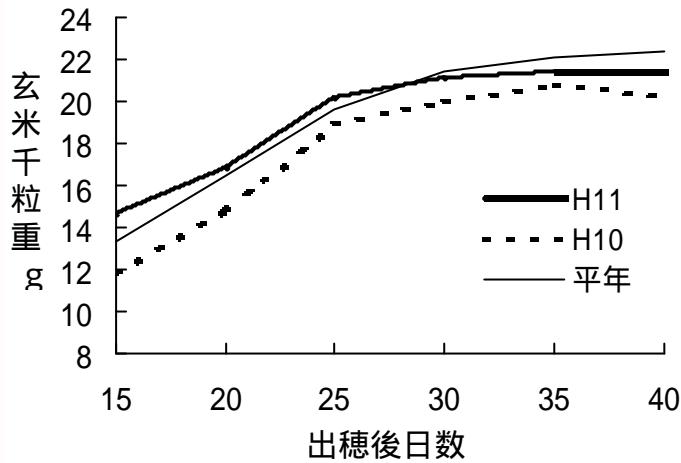


図5 玄米千粒重の推移 (ひとめぼれ)

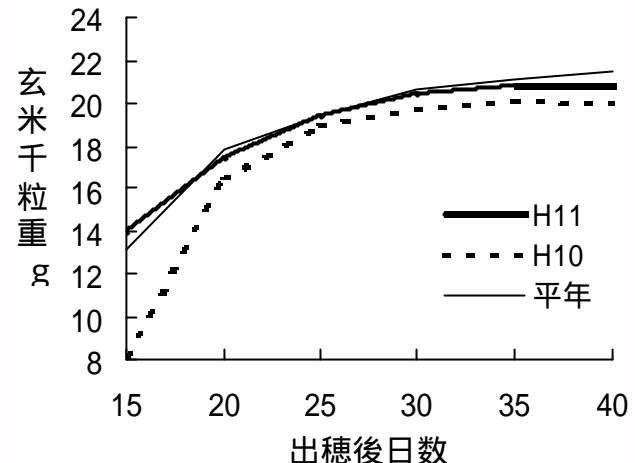


図6 玄米千粒重の推移 (ササニシキ)

これからの作業の要点

本年は、刈取り適期が早まったものの9月上旬後半から降雨が続いたため刈取り作業が遅れた。今後は、適正な乾燥と調製で品質の確保に努める。

【火力乾燥】

過乾燥は、胴割米の発生 碎粒の増加 光沢の低下等品質低下の原因となるほか、灯油や電気代等の生産コストが増加するので、きめ細かい水分測定により防止する。

【自然乾燥】

乾燥ムラを少なくするため、乾燥期間中に必ず掛け替えをする。時々、粉の水分を測定し、15.5%になったら脱穀する。

【粉 摺】

粉摺は、肌ずれ防止のため、火力乾燥した粉は、粉の温度を室温まで下げてから行う。また、ロール式粉摺機の場合は、粉(品種)に見合った適正なロール間隙に調整する。

【選 別】

米選機の網目はLL(1.9ミリ)を使用し、整粒歩合80%以上を確保する。